

サマセット・モームの三つの作品

——「月と六ペンス」を中心に——

増子博調*・芹澤 純*

(平成元年 11 月 6 日受付, 平成元年 11 月 28 日受理)

サマセット・モーム (W. Somerset Maugham)

25 January 1874, パリに生れ, 16 December 1965,

南仏ニースの付近サン・ジャン・カ・フェラに没

——美なるものこそ永遠の悦び, そは無に帰すること非じ——

ジョーン・キーツ『エンディミオン』

序論として

ゲーテの年 83 才をはるかに突破して, 91 才の天寿を全うした英国の作家モームは, いわゆる “Poètes maudits” (呪われた詩人たち) の概念を打ち破り, 作家の職業的自立, 社会上の地位向上に大いに貢献したのである。晩年の彼は, 最高級のホテルに泊り, 超一流のレストランで美食したという。又フランス南部に宏大な邸宅を構えていた。同じ「美」の探究を目ざしながら, たとえば上記のジョーン・キーツの運命を考えると, その対照に驚かされる。

モームは「月と六ペンス」の中で述べている。主人公, 特異な男 Strickland を訪ねて, 本道から 8 km も小径を入った彼の小舎で夕食に招ばれ, そこで夜を明かしたフランス人の船長ブルーノに対して, 作者 (=私) が, 「どうしてこんなに異なる性格の二人が互いに親しくできたのか」(後述) と訊ねたのに対して, この船長, 海の男は答える。「美です」と。

19 世紀初頭から始まった機械文明が加速度的に発達し, 20 世紀もやがて終ろうとする今の時期, もし人間たちのほうで何らかの手を打たない限り, 今や, 人間の頭脳, 手が造りだした機械のほうが, 徐々に自分たちの「創造主」たちを圧迫しだしている。このまま進めば, 果して多くの人たちが期待するように, 21 世紀が明る

い希望に充ちたものであるかどうか……そうするためには, では一体どうすればよいのか。自分たちの手を離れて, 一人歩きしてゆくかもしれない機械たちに対抗して, どういう対策を取らなくてはならないか?

たとえば, 20 年余り前, コンピューターの仕事にはじめて就労した人は, その間, 毎年毎年新しい技術を習得しつづけた。日新月歩で, 毎日の仕事に神経を張りつめて当らなくてはならない。

しかし芸術・文化は進歩どころか減退の傾向が見られる。退化現象である。キリスト紀元前世紀に制作されたギリシャのヴィーナス像を凌駕するものはない。プラトンの哲学, たとえば「饗宴」にしても, 魂の不滅の問題, 愛の問題, 美の問題についても, 2,500 年以上を経て, プラトンよりましな解答をだした哲学者がいるだろうか?

機械文明は長足に進歩し, その結果が, かえってマイナスの逆噴射を招く恐れがある現代, 精神文化が, かえって退化しつつあるかもしれない傾向がある。

いわゆる精神の所産になる文化は, 19 世紀からその延長線上にある 20 世紀初頭迄に, すでにそのエネルギー

一の放射の最大量を出しつくした感がある。

私にとって一番明瞭に感じ取られるのは音楽の世界である。この 20 世紀の現在が再生産 reproduction の時代であることは明らかである。カラヤンこそ、その再生産の寵児であり、音楽の帝王の称号を得た。まことに象徴的である。

ヘルベルト・フォン・カラヤン

1908 年 4 月 25 日～1989 年 7 月 16 日午後 1.30
(ザルツブルク) (ザルツブルク、アニス)

しかし、その前任者、ベルリンフィルハーモニーの首席常任指揮者としてのヴィルヘルム・フルトヴェングラーは、彼の本業は作曲家であると終生信じていて、何とか実践しようとし、ともかく、彼なりの作品を残した。

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

1886 年 1 月 25 日～1954 年 11 月 30 日
(ベルリン) (バーデン・バーデン)

作曲の世界で、ベートーヴェンこそ音楽の世界の頂点であり、皇帝である。ヴァグナーも彼のかたわらでは下位になる。華やかな国際活動をしていたフランツ・リストはこの帝王を信奉し、ベートーヴェンのボンでの彫像制作のため、コンサートを催して、ほとんど独力で基金を集めた。ベートーヴェン——ブラームス——ブルックナーの線が世紀の古典音楽の中央山脈を代表する。ブルックナーの巨大にそそりたつ峯に比すれば、マーラーは神経の巣の集まりのように繊細である。リヒアルト・シュトラウスの妖しい世紀末の夢幻に充ちた世界、代表的な「サロメ」……しかしそのいづれも、エネルギーの巨大な発散において、ベートーヴェンの頂点を超える人は出現していない。時代と共にエネルギーの衰退は明らかに見て取れる。

絵画の世界では、一言で述べて、Delacroix, Renoir, Manet, Monet, そして Gauguin, Gogh……この 19 世紀の大家たちの名をあげるだけで、答は自づから明らかであろう。

それでは文学の世界では？

近代に限定して言えば、答は出てくる。ただ、文学の世界は、音符の世界より、私たちにより身近なものであ

り、日常的なものである。手紙、日記類も立派に文学作品となり得る。従って、もっと複雑多岐である。19 世紀に生れた作家たちに絞って、いささか述べてみる。

Thomas Hardy

1840 年 6 月 2 日～1928 年 1 月 11 日

英国作家、南英の故郷を中心に田園小説に長じる。

Guy de Maupassant

1850 年 8 月 2 日～1893 年 7 月 7 日

フランスの作家、心理小説に長じる。

Arthur Schnitzler

1862 年 5 月 15 日～1931 年 10 月 21 日

オーストリア、ウィーンの典型的世紀末作家。

Gerhard Hauptmann

1862 年 11 月 15 日～1946 年 6 月 6 日

ドイツ、自然主義作家。

Romain Rolland

1866 年 1 月 29 日～1944 年 12 月 30 日

フランスの人道主義、平和主義者。

作家として若い頃多く発表。

代表作「ジャン・クリストフ」(1904-1912)

André Gide

1869 年 11 月 22 日～1951 年 2 月 19 日

フランスの作家。

「背徳者」(1902)

「狭き門」(1909)

Thomas Mann

1875 年 6 月 6 日～1955 年 8 月 12 日

ドイツの作家、亡命、後スイス在住。

「ブッテンブローク家の人々」(1901)

Roger Martin du Gard

1881 年 3 月 23 日～1958 年 8 月 23 日

「チボー家の人々」(1922-40)

Stefan Zweig

1881 年 11 月 28 日～1942 年 2 月 22 日

オーストリアの作家、南米に亡命。

「心の焦躁」(1938)

「昨日の世界」(1943)

John Galsworthy

1867年8月14日～1933年1月31日

英国の重厚な作家、近代古典派とでもいえる。

「フォーサイト家物語」(1906-21)

この小リストに10人の作家をのせた。その年代を見れば、大体サマセット・モームの同時代人たちであり、いわゆる充分にエネルギーの充電された中堅作家たちであることがわかる。

モームはパリの英国大使館内に生れ、10才までパリで育ったので、当然フランス語、フランス文化をまづ受容して育った。彼の作品には、その特徴がしばしば見られる。たとえば「剃刃の刃」の大部分の舞台はフランスであり、パリが主要な場を占めている。「月と六ペンス」は、ちもろんフランスの画家ゴッガンを扱っている。

モームとフランス文化・文学の影響関係は、比較文化・文学の好テーマであるが、その研究があるかどうか、私には不明である。「月と六ペンス」「剃刃の刃」等、フランス訳はポケット版で現在出ている。彼は近代作家の中で、フランスのみならず、世界各地に舞台をくり広げる最大級のコスモポリットであり、その場面の広汎さで、彼に匹敵する作家は少いであろう。ヨーロッパ各地(革命の嵐が吹き荒れるロシアも含めて)はもちろん、広く新大陸、東南アジア、南太平洋の島々にも及ぶ。その東南アジアは、主として旧英国植民地である。その意味で、彼こそ最も現代的視野を持った作家であり、大エネルギーを発散したマエストロと言えよう。19世紀の生んだ直系の大作家としたい。たしかに彼の芸術の純粋性について云々する批評家たちのいることは承知しているが。

美の徹底的な追求者である画家を描いて、あれ以上、その凄まじいエネルギーの爆発を描きこなし得る作家は稀である。又人生の多方面の活動、情念の様々なファセットを浮彫りすることで彼の名人芸に及ぶ作家は少ないであろう。その意味で彼こそフランスのモラリストたちの伝統の直接の後継者である。モンテーニュ、パスカル、ラ・ロシュフコー等を一括する広汎な意味のモラリストとは、人生探求者、人生の意義について問いかけている広義の哲学者といえるので、ロマン・ローラン、アンドレ・ジッド等もその系列に入る。

「剃刃の刃」の中で、最後に作家(私)が主人公 Larry に出会うのは、パリのフランス劇場であり、ラシーヌの「ペレニス」観劇のあとである。フランス17世紀の黄金文化の主要な代表者の一人ラシーヌをここに登場させ、しかも、愛と義務の板挟みになり、ローマ皇帝との恋を諦めて、東方に帰る「ペレニス」を持ってきたのは、モームの粹の極みと言える。このあと二人は近くのカフェに入り、夜を徹して朝の8時頃まで話す。ラリーが彼の魂の遍歴、ことにインドで悟りに入る体験を詳細に話したのである。第一次大戦で年齢を年上に偽わり、志願してパイロットとしてヨーロッパで戦ったラリーは、親友の犠牲によって、空中戦で生命を救われた。帰国してアメリカに帰った彼は、もうもとの学生生活に戻れないし、愛しているイザベラとの結婚にも躊躇う。そしてパリから始まって彼の人生探求が行われる、自己を発見するための。それをインドの山中で見出したのである。

本 論

W.B. サマセットのおびただしい作品から、特に三つの作品を取りあげ論評を試みた。その三つの作品にはいづれも共通の点が指摘される。

§ 三つの作品の内容

- | | |
|--|-------|
| (1) 月と六ペンス | 1919年 |
| (2) 異種 [第一人称で書かれた六つの短篇集の中の一
篇] | 1931年 |
| Six Stories written in the First Person Singular | |
| (3) 剃刃の刃 | 1944年 |

A. 反市民的生活の考え方——創造活動の重視

この考え方が、上記三つの作品を通して色濃く出ている。

B. 真の魂の故郷を求めてのノスタルジー

上記Aの考え方は、結局このBに直接繋がる。

§ 三つの作品について

「月と六ペンス」(1919)は、その内容に盛られた傾向からみて、後期の傑作「剃刃の刃」(1944)の作品を先き取りしている。25年も前に、すでに作者は、自己の真の姿を求めて、自己の Identity を求めて、さすらう主

人公の姿を刻明に追求している。「月と六ペンス」では、主人公の求めるものは、絵を描くこと、画業を完成させることであった。「剃刀の刃」でも、主人公ラリーは、普通の市民生活に入ることを拒み、愛する女性との結婚生活に入ることを断念し、自分の決めた針路を独自に歩む。ラリーがガール・フレンドのイザベラと結婚するためには、就職しなくてはならない。外交官の未亡人を母に持つイザベラはハイ・ソサエティの生活を送ることしか念頭にない。それにはラリーは友人の父親の経営するシカゴ株式取引所の一員となり、株の売買に明け暮れる他なかった。祖国アメリカを出て、パリで読書に没頭し、詩人や絵描きなどボヘミアンたちと暮しながら、ラリーは自己を発見しようとする。「異種」の中で、青年ジョージが両親たちの俗物根性——彼らはそれがエレガントであり、英国上流生活の慣習と信じこんでいる——に、厭気がさし、祖父母の住んでいたミュンヘンでピアノ修業に邁進しながら、文学者や絵描きたちボヘミアンと夜のカフェで過ごすのと、ラリーの生活は同型である。ラリーは自己追求に一生の意味を求めて、ドイツの鉱山や農村で労働し、ストラスブールの修道院で暮し、ついにインドに渡り、修行者たちのいる本場に辿りつき、数年の修業の後、悟りを得る。解脱の境地に達した。山中に夜明けの太陽の昇るのを見て、彼はそこに真の魂の故郷を見出した。(p. 276 参照)

次のは短篇でありながら、見事に凝縮して、心の故郷をひたすら求めようとする青年ジョージの純粋な姿が鮮明に描写されている。ユダヤ人一族の話で、祖父母の代までドイツ在住であった、商人(行商人)一家について述べている。息子の代では、英国の南部 Sussex に広大な領地を所有するに至り、しかも貴族のタイトルも持ち(最下位ではあるが)、政界にも顔を出している。その妻はまさに上流階級の夫人である。夫妻の間には二人の息子がいて、眉目美しく、いかにも上流階級にふさわしい長男の George は、しかし、こういった父母の Snob 式なやり方に反感を覚えている。大学までは、父母の望み通り英国風の大学教育を受け、スポーツにも励むが、卒業して、英国紳士にふさわしい職業につこうとしない。彼の熱望は、好きなピアノを続けたいということ。そしてピアノの修業をするために、ドイツの南部、華やかな世紀末の文化が爛熟していたミュンヘンにゆきたい、ということだけであった。独身の粋な人である大伯父 Rabenstein (ドイツ風の名前を第一次大戦中にも変えず、自分がユダヤ人であることを隠さない) や、祖母の執成(とりなし)で、2 年間だけミュンヘンでピアノ修業するこ

とを父から許可される。彼は質素なアパートに住み、粗末な家具の中で、ひたすらピアノ三昧に生きる。朝から夕方までピアノを弾きづめで、そのあと、ボヘミアンの芸術家たちの出入りするカフェで夕食を取り、ビール片手に芸術談議にふける。それが George の心の安住の地である。彼はそこに真の心の故郷を見出していた。一生そのような生活を継続することこそ彼の唯一の望みであった。背伸びして、伝統的な、由緒ある英国貴族の仲間入りなどしている両親たちの生活は、彼には積木細工にしか思われない。大学まで親の言いつけに従っていた彼に、いわば種族本来の願望というものが頭を擡げる。自分は英国貴族ではない。英国人種ではない。ドイツ系のユダヤ人である、という自覚が目覚める。彼がミュンヘン行きを許可されたのは、条件付きであった。2 年間そこで精進し、その結果を、ピアノの専門家に判定してもらい、もしそのテストにパスしなかったら、いさぎよくプロのピアニストたることを諦め、英国紳士らしい職業につくという父との約束であった。その 2 年間で過ぎて、彼はいったん英国の父の領地に戻る。素人としてピアノもよくする大伯父の親しい友人である、高名の女流ピアニストが領地を訪れて、多忙な時間を割き、彼の仕上った管の演奏を聞いてくれた。結果は惨めなものであった。プロのピアニストとしての才能は全くないという判定であった。右手と左手のバランスが取れていない。この作品で作為があると思われるのはこの点である。モームの作品には、話の興味を増すためか、作為が目立ち、すんなり受け容れられないケースが時々散見する。具合の良いことに、とんでもない飛躍と思われる「月と六ペンス」は、実在のモデルがあるので、この難を免かれるが。私は「丘の家の別荘」に、我慢のならない作為を感じる。それはフローレンスの丘の家が舞台である。「異種」の場合、余人ではない、George 本人が、自分の弾き方がまづいこと、右手と左手のテンポのバランスが取れていないことなど気付いている筈である。何故、わざわざ父たちが専門家を呼び寄せるままにし、その苛酷な批評に甘んじたのか——それが直ちに彼が自ら選んだ死につながるのであるが。

George の場合、次の引用文が当てはまるであろう。

—Perhaps some deep-rooted atavism urges the wanderer back to lands which his ancestors left in the dim beginning of history.

訳「おそらくは深く根づいている隔世遺伝(先祖返り)

が、放浪者に、彼の先祖が（その一家の）歴史のおぼろげな初期に離れ去った、その元の土地に戻るよう促すのであろう。」（『月と六ペンス』ポケット版原書 p. 180）

§ 「月と六ペンス」

私が何より注目しているこの作品は圧巻である。おそらくは何十冊と重なるゴーギャンの伝記の伝える以上に、この作品こそ、ゴーギャンなる怪物の特徴を見事に捉えているのでなかろうか。そしてこの作品の主人公 Charles Strickland も、ここに記されているように、彼の中の父祖の血がさわいで、彼を促して、中年に達してから、それまで築いてきた英国式の裕福な中流市民生活の一切を投げうたせ、いわば仮面にしかすぎない英国紳士のマスクを外させ、服装もかなぐり捨てさせ、素手で内部に荒れ狂い始めたデーモンの声に従う気にさせたのでなかろうか。Strickland が絵を描きたいという熱望は、自らの内部に鎖を解き放たれたデーモンを必死で手なづけたいという願望に他ならなかったのではなかろうか。それが彼をして 40 才にしてある日突然に、一片の短い置手紙だけで妻子を捨てさせ、株屋の売買人の身分から脱出させたのではなかろうか。芸術のメッカとされたパリにゆき、そこからマルセイユを経てフランス領タヒチにおもむかせる。そこで、最後にこの世ならぬ壮麗な天地創造を現わす壁画を小屋の四壁に描き出し、ようやく内部のデーモンから解き放たれて、息絶える。晩年、業病に犯されていた彼は盲目となり、それでも自分の手で描き上げた絵の前に坐り続けていた。芸術至上主義の最極端のケースであり、そのために、彼は周囲の人々をすべて犠牲にしていた。パリの薄汚いホテルの一室で熱病に取りつかれ、死にかけていたところを、天使のようにお人好しの、凡庸な画家 Dirk Stroeve というオランダ人に救われる。この人は自分の二間しかないアパート（アトリエとサロン）に重病の Strickland を運びこみ、厭がる妻を拝み倒して、献身的な看護に当る。おかげでめっきり回復した Strickland が、忠実な友人に代償として残したものは何であったか。Stroeve の妻ブランシュの裸身の目を瞞るような見事な画像であった。御本体は、自らのみ下した毒でこの世から姿を消していたのだ。この天使のような男の妻を奪う結果となり、あとは重荷として捨て去った時、本人ブランシュは、懇願する夫のもとに戻るのを承知せず、自ら死を選んだのだった。憐れな夫が手にしたのは、活きた生身の女性の代り

に、美しいが物言わぬ画像だった。

やがて Strickland は、マルセイユを経て、タヒチ島に渡った。そこで温い庇護者に会った。そのホテル「花」の経営者チアレ・ジョンソン夫人で、彼女はこの特異な男を好み、彼に Ata という若い土着妻まで世話をする。アタのものである人里離れた小舎に住みついた彼は、心から満足して作画に耽ける。この最初の 3 年間は Strickland の最も幸福な生涯であった。その小舎は主道路から 8 km も入った山奥であった。

フランス人のブルーノ Brunot 船長が島に来た時、ジョンソン夫人の引き合せで、作者は Strickland の小舎の様子を知る。船長は一度、ここを訪ねたことがある。

“but the place where Strickland lived had the beauty of the Garden of Eden. …the rich, luxuriant trees. It was a feast of colour. And it was fragrant and cool. …And here he lived, unmindful of the world and by the world forgotten,”

訳「Strickland が住んでいた場所は、エデンの園の美しさを備えていた。豊かで、見事に繁茂している樹木。それは色彩の饗宴であった。それは香ぐわしく、ひんやりしていた。……ここに彼は住んでいた、世間のことを構わず、世間から忘れさられて。」（前掲書 p. 191）

「あなた方のような全く異なる人間が目指すものは一体何なのでしょうかね？」

と作者が船長に訊ねたのに対し、この海の男は答える。

「美ですよ」と。——（前掲書 p. 195）

Strickland は自分と同国人（家族でさえ）の間で期待もしないし、望みもしなかったものを、この異郷の僻地で得たのである。「共感 Sympathy」である。「美」は単純な心の人々を動かしたのである。いわゆる文明人がそれを肯定する前に、彼の画の「美」をタヒチの人々は受け容れた。

幸福な 3 年間がすぎた後、Coutras 医師の診断で——彼の周囲の人々はすでに知っていた——彼が業病に冒されていることが分る。それからおよそ 3 年近くすぎて、彼の最期の時がきた。そして妻アタからのしらせで、徒

歩で山道を辿り着いた医師が目にしたものは、粗末な小舎の四方の壁に描かれたこの世ならぬ華麗多彩な壁画であった。天地創造の図柄であったという。P. 207, 208, 209, 210 にかけてその画の前代未聞の壮麗さが描写されている。その目にした場面は医師の脳裡に焼きついて離れようとしなない。それは「アダムとエヴァ」の題材ともいべきもので、「男女の人間の肉体の形への賛歌であった、自然の賞賛であった、崇高で、無関心、愛らしくて、残酷な自然への。それは、見る人に、無限の空間と無尽の時間という畏るべき感じを与えた。」

しかしこの壁画は、Stricklandの最後の命令で、土着妻アタによって、小舎もろとも焼き払われた。Michelangelo のシスティヌス禮拜堂の大壁画に勝るとも劣らなかつたであろうこの壮大な傑作を目にしたのは、土地に住むフランス人の医師 Coutras のみということになっている。モデルと考えられる——かなり細目は変えてはいるが——ゴーギャンの実際の話に基づいて述べられている。唯一人の目にしか目撃されなかつた壁画（実際のゴーギャンの場合は私には明らかではないが）——その伝説として、医師の脳裡に焼きついて離れない人類の傑作は、何となく人類のネガティブな未来を予告していないとはいえないと思う。悲しいことであるが。

英文の順序と異なるが、作者が始めて Strickland の画を見せられた時の印象が記されている。

作者はパリを愛する文学者らしく、「私はシスレーやドガを悦んで所有したいし、マネを崇拜していた。マネの Olyimpia は近代最大の傑作と思えし、『草の上の昼食』は、深く私の心を動かした」（前掲書 P. 148）

そういう「洗練された」フランス趣味の彼にとって、Strickland にパリで見せられた数々の画は、頂けないものだった。ただその彼とて、その画から立ち昇る得体の知れない魔力のようなものに打たれずにいられなかつた。そこに、真の力が自らを表現しようとうごめいていたことを感ぜずにいられなかつた。真の力とは？ 宇宙の巨大な力が、彼という一人のごく平凡な男の肉体に宿ってしまったのだった。その力は、その人間の意思にかかわりなく、自らを主張し、肉体の殻を破って爆発し、自らの姿を示さずにはいられなかつた——それが Strickland を駆り立て、すべてを犠牲にしても、画を描かせた。それを完成しない限り、彼の精神に安らぎはなく、気の休まることはなかつた。ロンドンの安住の地を離れてパリのみすばらしい一室で5年間余、それからタヒチに渡り、3年間を山中に愛らしい忠実な土着の妻と幸福に

過し、そのあと3年近く業病に取りつかれながらも戦いつづけ制作し、ついに息が絶えた、彼は自分の内部に宿った力、デーモンからその時始めて解放されたのである。

彼は芸術創作に没頭するためにすべてを捨て去った、その最大の障害は彼にとって、女性、妻であった。彼はもはや妻の管理下に、英国中流階級の紳士の役目をする気にはなれなくなっていた。面白いことは、作者が Strickland の不意打ちの家出の前に、この一家を典型的英国家庭と信じ、自分はそうした道を辿りたくないと明記している事実である。それは、VII 章（短くて2頁足らず）の終りに記されている。

ごく普通の市民の夫婦生活を静かな流れにたとえ、自分はそれに漬かりたくないと明言している。「私は、このような安易な喜びの中に警告すべき何かを見出す。私の心の中には、もっと危険を冒して生きたいという願望があった。私は巖々たる巖石や危険な暗礁も覚悟していた、もし私が変化を持つことができたなら——変化と未見のものへの興奮。」

この作品は 1919 年に発表。ところで、彼は 1913 年に美しい婦人 Syrie Wellcome と知合う、このエレガントな婦人、別居中の夫人は、Maugham との間の子供を望み、モームは承知する。1916 年彼は Syrie と結婚し、1927 年には離婚している。この事実を考えれば、彼が、かなりの程度、自分の体験から「女性」に束縛されない自由な芸術家の生活を望んでいたことが明らかになる。それはオーストリアのモーパッサンと言われるシュニッツラーが、その代表作「自由への道」で Georg von Wergenstein に言わせていることと同じである。彼は Anna を愛し、結婚しないで彼女に子供を作るが、決して彼女と結婚する気にはなれないでいる。モームが英国のモーパッサンと称せられているのと考え合せて興深い類似である。

§ 「剃刀の刃」についての附記

モームは 1938 年インドを訪問している。「剃刀の刃」は、彼がかって行ったことのあるマレイ半島や南太平洋での、主として英国人たち——植民地の支配者階級として——の日常生活の描写といささか趣きを異にしている。そのさりげなく、半ば興に駆られた筆走りの中に、彼は鋭く白人たちを批判し、その中でも心の温い人々、物分りの良い人々をそうでない威張り屋、心の冷い、原

住民を人間扱いしていない人々と区別している。かつてアンドレ・ジッドがフランスの植民地コンゴで、その巧みなエッセ、紀行文で批判しているのとは多少異なり、何気ない日常生活の中に、彼の観点が見てとれるのであるが。それに比べて新作は、はるかに深い彼の人生哲学を示す。

彼はインドに深く魅せられ、二度目の訪問を企てるが第二次大戦突発（1939年9月）で妨げられる。にもかかわらずインドの底知れない謎を秘めた存在は、彼の心に滲透し、「剃刃の刃」は傑作として、その最終章に見事に結晶している。別な論文にその部分を引用し説明したのでここでは簡略するが。

戦後、フィルム化されたこの作品は、大戦後の虚脱感の漂う青年たちの心理に大いなる感化を与えたという。そこに巨大な虚無を突き抜けて、さらに生の意味を見出し得たのだろうか？ マナーとエロスに支配され、狂奔している群衆はそのまま、直接に現代の世相にも通じないであろうか？

もうあと10年で20世紀が終ろうとする現在の地点で、私たちはこの作品から何を学び取るであろうか？

インドのマハラージャ（ラージャより高位の君主）たちは、自分（白人）が、虎狩りなどに興味はなく、詩人や哲学者たちに関心があると言うと、すぐに、自分を助けてくれた。——（剃刃の刃から引用）

モームを惹きつけたのは、インド哲学者たちや苦行者たちの異常な精神力であった。物質生活——富や官能の歓楽——を否定し去ることで、彼らは極端な精神の集注力を獲得するのであった。モームは the Carnal（肉体的なもの）を超えた領域に精神の洗練を看取った。そして精神的昇華、浄化の価値を、主人公のラリーを通して体得させている。

物欲を否定し、地上的享楽から離脱し、純粋に芸術に精進するストリックランドやジョージ、そして悟りを開くラリーと、この三つの作品のテーマには土台となる共通点が存在する。

※以下の英文は上記本論の内容の要約で、訳ではない。

On the three works of William Somerset Maugham

—A thing of beauty is a joy for ever.

It will never pass into nothingness—

John Keats: Endymion

by Hiroshige MASUKO and Jun SERISAWA

A. The Anti-family Idea for the sake of Creative Activities

- | | |
|--------------------------|------|
| 1. The Moon and Sixpence | 1919 |
| 2. The Alien Corn | 1931 |
| 3. The Razor's Edge | 1944 |

B. The Quest of Home. A Nostalgia for a Home

A. The Anti-family Idea for the sake of Creative Activities

William Somerset Maugham was born in Paris, 25th January 1874 and died at Saint-Jean Cap Ferrat by Nice in France, 16th December 1965. So he surpassed the

Goethean age, that of 83 years. Thomas Mann and Hermann Hesse died both like Goethe at the age of 83 years. Maugham lived till 91 years. He left behind him a lot of novels, stories, plays, essays & etc. Among them I have chosen at first three works: "The Moon and Sixpence" (1919),

"The Alien Corn" (Quartet) (1931) and "the Razor's Edge" (1944), but finally I decided to concentrate myself on the first work, "The Moon and Sixpence".

I have chosen the three works because they have some common points. The three works treat the problem of art, philosophy and culture in contrast to a commonplace everyday life. Each hero of these works abandons his "family" in a respectable situation.

In the first work, "The Moon and Sixpence", Charls Strickland at the age of forty abandons his wife, children and his job for the pursuit of art, in order to become a painter. In the secondly mentioned work, "The Alien Corn," the son of a wealthy and noble family of Jews, the landowner of Tilby in Sussex in England, George Blands, the son of Sir Freddy Blands, and a grand-nephew of Ferdy Rabenstein, leaves his family to live in Munich and study piano which is his only passion, without which he cannot, dares not live further. For him wealth, fame and happy marriage mean nothing without his piano. But two years of practice in piano in Munich do not improve his piano playing, on the contrary it proves the lack of his musical talent. Pointed out the lack of his musical talent by a famous lady concert pianist who is the good friend of his great uncle, he commits suicide, losing all the hope in his future life. Thus he leaves his family definitively who so much expected on him to be heir to the noble, wealthy family. George was so happy, living in a simple apartment in Munich as a student, occupying himself only in piano playing and finding himself among bohemian artists, musicians in a café of Munich.

In the third work, "the Razor's Edge", the hero, Larry (Laurence) Durrell, after his early experience as pilot (hardly seventeen years old at the first war in the French front) cannot assimilate himself to the normal, American life as before. For instance he refused to come back to a college, a normal course for a boy of his milieu, he refused also to work as a stockbroker in the office of his friend's father, Henry Maturin, the most wealthy man in Chicago who possesses the

best stockrage house in the city. His attitude irritates much Isabel Bradley, his best girl friend, a daughter of dead diplomat and the widow Mrs Louisa Bradley, a very wordly lady.

We can see their relations—those of Larry and Isabel—at pp. 50, 52, 53 in the edition of Penguin Books 1963.

Finally Larry asks Isabel to let him go to Paris to find "himself". In the modern terms to express, he wants to find his "identity". He passes his time in Paris mostly in libraries, reading and finds his companions ("camarades") among bohemian-type men, just like George Brands in Munich in the short story, "the Alien Corn." Two years pass away, the limit of time which he asked Isabel to postpone their engagement. But, unable to make further steps to fulfil Isabel's desire to take a good job, he is obliged to give up his wish to marry her. On her part she could not consent to his desire to be satisfied with his modest financial means and to live with him. For her it is essential to live in a luxurious style of life, belonging to the high society. In order to satisfy her desire she marries Gray Maturin, the friend of Larry, and the son of the richest family in Chicago, although she loves still Larry much more.

Even after the marriage of Isabel with Gray, Larry frequents the house of the new couple. It is he and the "original" uncle of Isabel, her mother's elder brother who saved the family Isabel-Gray from the crisis of the economy caused by the collapse of the prices of the stocks in USA. But Larry could not save their girl friend, Sophie Macdonald who, after having lost her husband and her child, because of a car accident at the same time, fell in bad habit of drinking alcohol. She came to Paris also and was leading an immoral life in a bad district. Larry met her with the Maturin couple in a café or in a bar. Since their unexpected meeting there Larry thinks much about her and tries to save from the bad habit of drinking, living with her. He wants to marry her, the plan which was suddenly interrupted by the wicked intrigue of Isabel who wanted to hinder their marriage because of jealousy on

her part, Sophie disappears from them for ever, she was found drowned in the south sea of France, cruelly murdered. After the tragical disappearance of Sophie, Larry disappears also from the sight of Isabel and tries all kinds of works and practices to find "himself", the true meaning of life, to identify himself, living in a monastery in Alsace, working in a mine.....

At last he came to India, met Shri Ganesha who gave him the chance to "the Revelation," to "the inside Enlightenment". Larry came at first to Bombay, then to Elepanta to see the famous Cave. Then to Benares. He lived there six months, then to a rose-red city, Madura and then to Travancore (the capital is Trivandrum) and finally to Ashram to see the Yogi, Shri Ganesha, who advised him to live in a dwelling-place in which Shri himself lived before.

(Note: Swami means prince, lord, master.)

Larry could live also in a bungalow up in the mountains, thanks to a native forestry officer. It is there on the mountain, after two years of life in Ashram that Larry was enlightened from Inside through the divine revelation at the break of the day, just on his birthday.

He found what he was seeking.....so long-time, with various means. He felt "as though he were suddenly released from his body and as pure spirit partook of a loveliness he had never conceived. He had a knowledge more than human possessed, so that everything that had perplexed him was explained....." (p. 276 参照)

And so he came back to Europe and then to his country, United States, to live there as an owner taxi driver in order to give him time to make researches and thus to write down a book on his thoughts. Instead of marrying a woman like Isabel, a wordly woman who expects of her husband to earn enough money to let herself and children live in a luxurious way, he devotes himself, his life to find his identity, to find himself as an integral personality. Here we see clearly the intention of the auther, if not to dispise, at least to underestimate a typical bourgeois life style. Instead he estimates the

life of pursuing the truth of universe, of human life itself and trying to devote himself to a creative work.

The Moon and Sixpence

This work was written in 1919 and so we can conjecture that it foresaw already the "Razor's Edge". This novel is written based on the life of Paul Gauguin (1848-1903) (after 1890 in Tahiti), the most famous French painter.

The auther describes a portrait of a man, Charles Strickland who consecrated himself to the painting, abandoning his wife, children and his job as a stockbroker at the middle age of forty (Gauguin left his family at the age of thirty-five). Gauguin was French and his wife Danish. But in this novel the hero is Englishman in a typical upper middle class. He left his family quite unexpected only with a short letter, telling that he was leaving them and would come back no more in order to live in Paris. It was a great shock to his wife Amy and to her elder sister Dorothy and her husband Colonel Macandrew.

Thus obtained Strickland what he wanted, the freedom, free to live as he will, free to die as he will, poorly or as great artist. He has chosen the life of extreme risk, full of thorns on the way which he preferred to the easy life in the warm bosom of his family, enveloped with the warm affection of his wife. He abandoned the comfortable bed to exchange it against a hard and cold bed in a shabby hotel in a district of bad reputation in Paris. But he was satisfied because he could be absorbed in painting, disturbed by nothing but by poverty. It is just the same case with that of George Brands in Munich. He needed no more to spend his precious time to earn money for his family. It is also the case by George.

The auther asks himself often what led Strickland to have such a bohemian, thoughtless life. A kind of answer came to his mind as he saw for the first time the pictures of Strickland in his shabby room in Paris. The auther describes the man as a person in whose body is housed an unknown power, quite strange to an earthly, wordly elements and

who under the domination of this mystical power suffers and in order to liberate himself from this power, devotes himself to the painting, sacrificing his family and even himself. The painting became his only passion and ambition. His Demon drives him from London to Paris, from Paris to Marseille, from there to Tahiti, his endstation, where he dies, as his wife cursed once, from "a loathsome disease." Nevertheless it is also his inner Demon which makes him accomplish the works after which he aspired with all his power and means, sacrificing everything around him, not only his family but also his good friends who tendered him and saved him from the ignominious death in Paris. Among them was Blanche Stroeve who fell in love to this merciless painter, leaving her angel-like husband. She committed suicide as she was abandoned by Strickland. He also sacrificed himself. He left, after him, master-pieces, equal in the value to Gogh. But the author tells us, the greatest of his pictures are those he painted on the four walls of his hut which were burnt down with the hut according to his testament by the faithful Ata who took care of him till the last moment, without escaping from the "loathsome disease". These wall-pictures were seen, except his family, only by the eyes of a doctor, Coutras, habitant of Tahiti. He came to the dying Strickland by a message of Ata to attend him in the last moment but he arrived just after his death to bury him under a mango tree. This doctor had the time to see the marvellous pictures of the "Creation" before they were burnt down by Ata, the faithful second wife of Strickland.

What was the meaning of his life? For what purpose did he offer his poor body to be destroyed by cursed disease? His pictures were primitive, simplified as if to express better the mysterious powers which moved him irresistively, shaking him down till the explosion of his poor body. It seemed, he was only used as a medium of an unknown power of the universe to express itself on the earth. He himself was nothing but a prisoner of this power inside of his body.

B. The Quest of a home. A Nostalgia for a home.

Citation from "The Moon and Sixpence" (p. 180)

I have an idea that some men are born out of their due place. Accident has cast them amid certain surroundings, but they have always a nostalgia for a home they know not. They are strangers in their birthplace, and the leafy lanes they have known from childhood or the populous streets in which they have played, remain but a place of passage. They may spend their whole lives as aliens among their kindred and remain aloof among the only scenes they have ever known. Perhaps it is this sense of strangeness that sends men far and wide in the search for something permanent, to which they may attach themselves. Perhaps some deep-rooted atavism urges the wanderer back to lands which his ancestors left in the dim beginnings of history. Sometimes a man hits upon a place to which he mysteriously feels that he belongs. Here is the home he sought, and he will settle amid scenes that he has never known, as though they were familiar to him from his birth. Here at last he finds rest.

I found this part later and should like to add here. This "Nostalgia for a home they do not know" element is found in the three works of Maugham mentioned above. In "the Moon and Sixpences" the attempts of Charles Strickland of a normal middle-class of England proves to be nothing but his search for a true home. Fortunately he could find it in the Island of Tahiti, French territory. Besides it was Paris rather than London, which was his home for art. It was not his English wife Amy, intelligent English-woman, but Ata, native of Tahiti without special education who proved to be a faithful wife to him. In the second work, "the Alien Corn" it is in Munich, capital of "Bayern," not in London or in the territory of his father, that George Brands found the true home of his own. It was also the home of his grandparents of Jewish origin. In the third work, "the Razor's Edge" Larry Durrell seeks for

his homeland, in Paris, Alsace, Germany and finally in India he find it.

The three works of Somerset Maugham:

The Moon and Sixpence

1919, the first edition

The pages of citation in this article is from the Penguin pocket edition.

The Alien Corn 1931

Included in six short stories.

This story was filmed with the title of "Quartet" after the second war.

The Razor's Edge 1944, the first edition.

Pocket edition later

The works on Somerset Maugham referred:

Robin Maugham "Somerset and all the Maugham"

Edition: Longmans

Heinemann in London

A biography written by

his nephew

Frederic Raphnel: "Somerset Maugham and his world"

Edition: Thames and

Hudson in London